

米国 総合・コアともに市場予想通り (07年10月消費者物価)

発表日：2007年11月15日 (木)

～コアインフレは前年比でも緩やかな伸び持続～

第一生命経済研究所 経済調査部

桂畑 誠治(かつらはた せいじ)

(03-5221-5001 : sei.ji@dlri.dai-ichi-life.co.jp)

- 10月の消費者物価（総合）は前月比+0.3%と市場予想通りとなった。食品価格が同+0.3%と減速したが、エネルギー価格が同+1.4%と加速した。
- エネルギー・食品価格を除く消費者物価（コア）は前月比+0.2%と市場予想通り。緩やかな景気拡大に伴って基調としては物価上昇圧力が減退しているが、鈍化ペースは緩やかなものにとどまっている。財価格は価格競争が激しいため非常に安定しているものの、住宅購入の減少によって賃貸需要が高まっている家賃（帰属家賃）や高齢化が進むなかで需要が強い医療などサービス価格の上昇圧力は強い状態が続いている。
- 前年比では総合が+3.5%（前月+2.8%）と加速したが、コアは+2.17%（同+2.14%）と前月とほぼ変わらずとなった。①FRBが物価安定と判断しているレンジの上限付近で推移しているなかでコアインフレの鈍化に一服感がでていること、②さらに緩やかな景気拡大が続くなかで稼働率が9月に82.1%と高い水準で推移し失業率もNAIRUを約0.5%ポイント下回っていること、③原油価格が最高値を更新する状況が続いていることなどから、FRBはインフレ動向を注視する姿勢を示すと考えられる。
- 今後は、価格動向に大きな影響を与える競争環境は、アジア・中南米等からの安価な製品が引き続き流入する状況にある。このような中では、原材料価格や労働コストが上昇しても価格転嫁は難しく、財価格は緩やかな上昇が見込まれる。一方、高齢化による医療サービス価格の高止まりが続こう。以上のことを勘案すると、CPIコアは前年比+2%台前半での推移が見込まれる。

消費者物価 (Consumer Price Index)

	消費者物価		コア		エネルギー	食品	住宅	アパレル	運輸	医療	商品コア	サービスコア
	前月比	前年比	前月比	前年比								
07/02	+0.4	(+2.4)	+0.241	(+2.7)	+0.9	+0.8	+0.4	+0.5	+0.1	+0.5	+0.1	+0.3
07/03	+0.6	(+2.8)	+0.061	(+2.5)	+5.9	+0.3	+0.2	▲1.0	+2.8	+0.1	▲0.1	+0.1
07/04	+0.4	(+2.6)	+0.177	(+2.3)	+2.4	+0.4	+0.2	▲0.3	+1.2	+0.4	▲0.1	+0.3
07/05	+0.7	(+2.7)	+0.150	(+2.2)	+5.4	+0.3	+0.2	▲0.3	+2.8	+0.3	▲0.1	+0.3
07/06	+0.2	(+2.7)	+0.232	(+2.2)	▲0.5	+0.5	+0.3	▲0.6	▲0.2	+0.2	▲0.1	+0.3
07/07	+0.1	(+2.4)	+0.236	(+2.2)	▲1.0	+0.3	+0.2	+0.4	▲0.3	+0.6	+0.1	+0.3
07/08	▲0.1	(+2.0)	+0.150	(+2.13)	▲3.2	+0.4	▲0.0	▲0.5	▲1.2	+0.5	▲0.0	+0.2
07/09	+0.3	(+2.8)	+0.220	(+2.14)	+0.3	+0.5	+0.3	+0.3	+0.1	+0.3	▲0.0	+0.3
07/10	+0.3	(+3.5)	+0.159	(+2.17)	+1.4	+0.3	+0.2	+0.0	+0.4	+0.6	▲0.0	+0.2

(出所) 労働省 (Department of Labor)

(注) 数字は季調済前月比。但し、() 内は前年同月比 (未季調)。

CPIは前月比+0.3%と市場予想通り

10月の消費者物価（総合）はエネルギー価格の上昇によって前月比+0.3%と市場予想通りとなった。食品価格が同+0.3%（前月同+0.5%）と鈍化したが、エネルギー価格が同+1.4%（同+0.3%）と加速した。エネルギーでは燃料油が同+2.6%（同+1.0%）、ガス・電力が同+1.3%（同+0.1%）、ガソリン価格が同+1.4%（同+0.4%）と加速した。

CPIコアは前月比+0.2%と市場予想通り

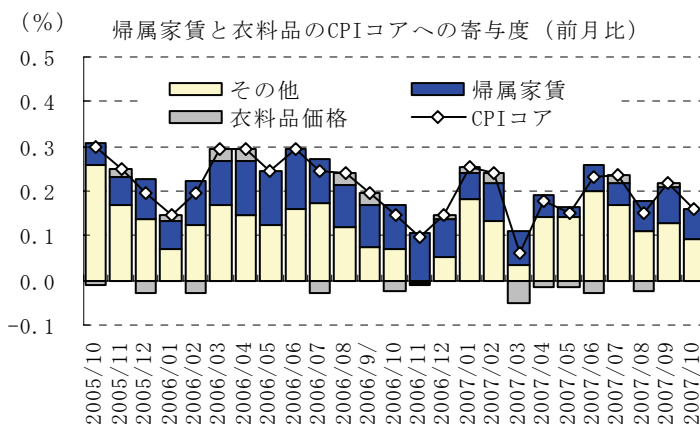
エネルギー・食品価格を除く消費者物価（コア）はサービス価格の上昇ペースが鈍化し、商品価格もほぼ横ばいとなったことから前月比+0.2%と市場予想通りとなった。緩やかな景気拡大が続くなかで、物価上昇率の鈍化ペースは緩やかなものにとどまっている。財価格は価格競争が激しいため非常に安定しているものの、住宅購入の減少によって賃貸需要が高まっている家賃（帰属家賃）や高齢化が進むなかで需要が強い医療などサービス価格の上昇圧力は強い状態が続いている。

サービスコアは前月比+0.2%と減速、商品コアは同▲0.0%と変わらず

CPIコアは、生産者物価や輸入物価の影響を受ける商品価格（除くエネルギー・食品）が3分の1を占め、サービス価格（除くエネルギー）が3分の2を占めている。

10月の商品価格（除くエネルギー・食品）は前月比▲0.0%（前月同▲0.0%）と変わらずとなった。中古車・トラックが同▲0.1%（同0.0%）と下落したものの、新車が同▲0.2%（同▲0.3%）と減少幅が縮小したため自動車全体では同▲0.1%（同▲0.2%）と下落ペースが鈍化した。また、医薬品が同+0.3%（同0.0%）と加速した。一方、男性衣料が下落したうえ、女性衣料が下落幅を拡大したため衣料品は同0.0%（同+0.3%）と鈍化した。PCは同▲1.4%（同▲0.7%）と下落幅が拡大した。

サービス価格（除くエネルギー）は前月比+0.2%（前月同+0.3%）と鈍化した。電話サービスが同+0.2%（同+0.1%）、教育費が同+0.7%（同+0.2%）、輸送サービスが同+0.3%（同+0.2%）、医療サービスが同+0.6%（同+0.4%）、賃貸料が同+0.5%（同+0.3%）と加速した。一方、娯楽が同+0.3%（同+0.3%）と変わらず、ホテルなどの宿泊費が同▲1.5%（同+1.0%）と下落に転じた。加えて、帰属家賃が同+0.2%（同+0.3%）と減速した。



前年比での鈍化に一服感

各種消費者物価統計の前年比での動向では、総合が+3.5%（前月+2.8%）と加速したが、コアは+2.17%（同+2.14%）とほぼ変わらずとなった。より実態の物価動向を示す連鎖CPIコアは+1.80%（同+1.75%）とほぼ変わらず。①FRBが物価安定と判断しているレンジの上限付近で推移しているなかでコアインフレの鈍化に一服感がでていること、②さらに緩やかな景気拡大が続くなかで稼働率が9月に82.1%と高い水準で推移し失業率もNAIRUを約0.5%ポイント下回っていること、③原油価格が最高値を更新する状況が続いていることなどから、FRBはインフレ動向を注視する姿勢を継続すると考えられる。

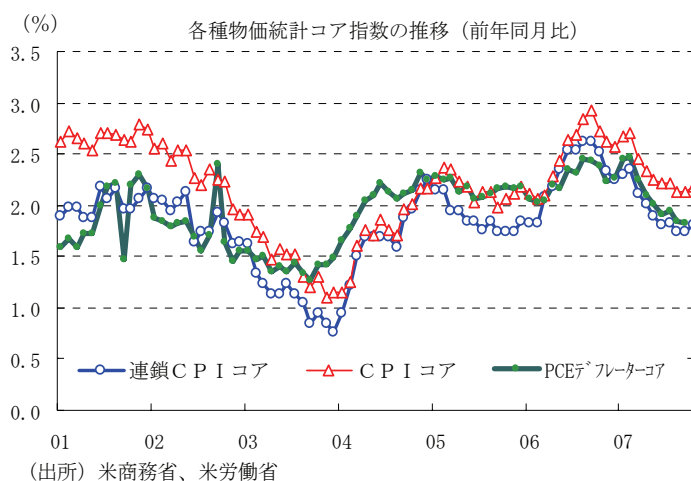
今後に関しては、低い失業率を背景とした賃金の上昇が予想されるが、労働生産性の鈍

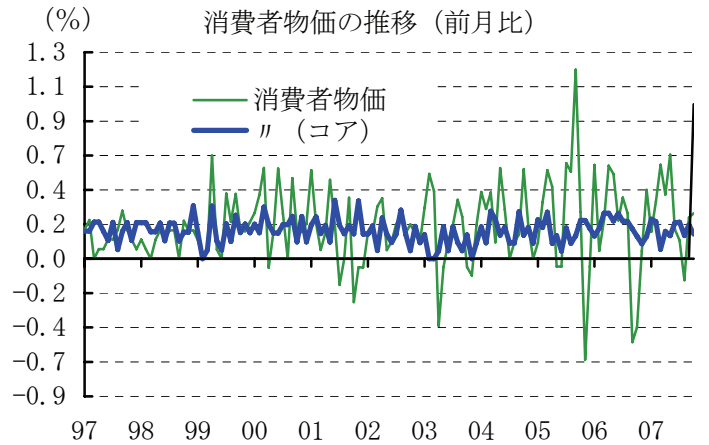
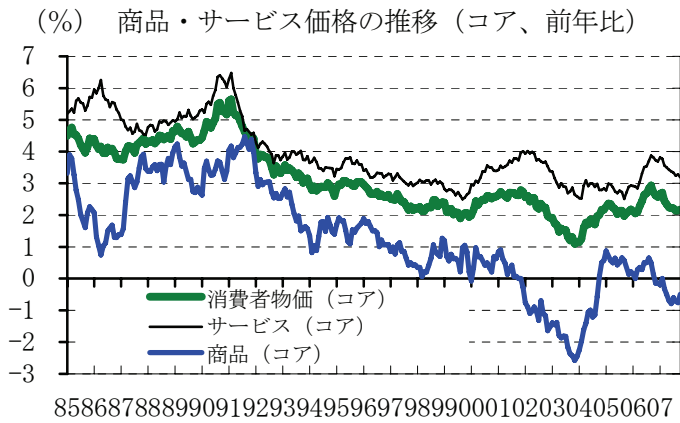
本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

化が見込まれ、U L C（単位労働費用）は比較的高い伸びが続く公算が大きい。

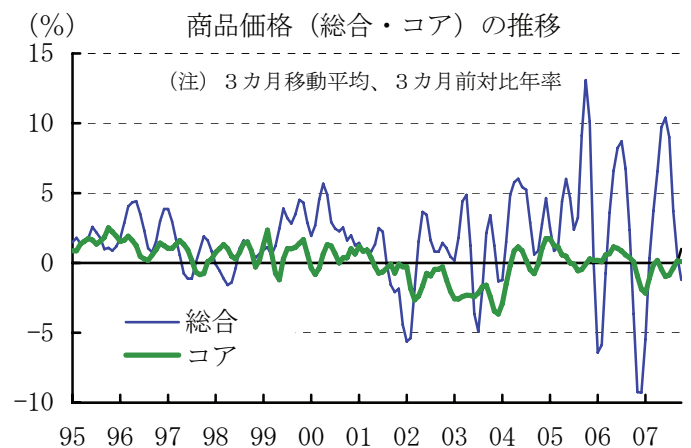
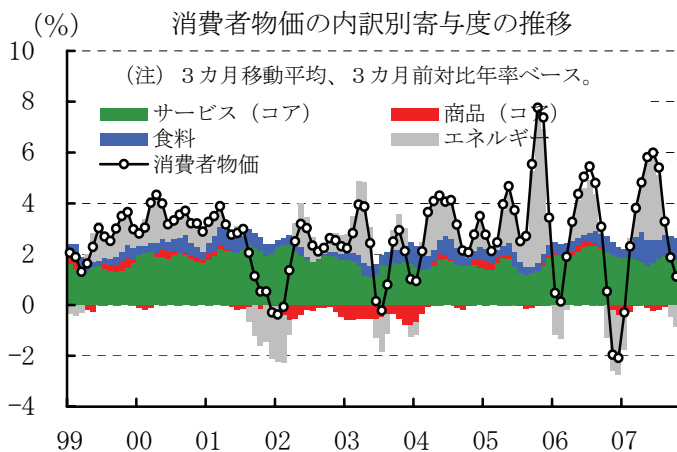
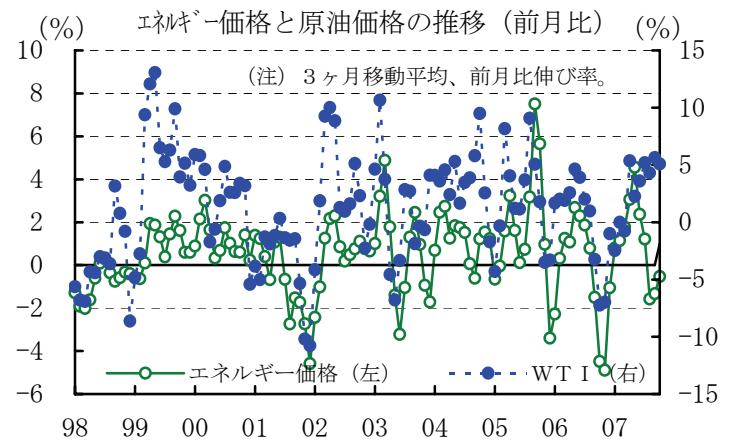
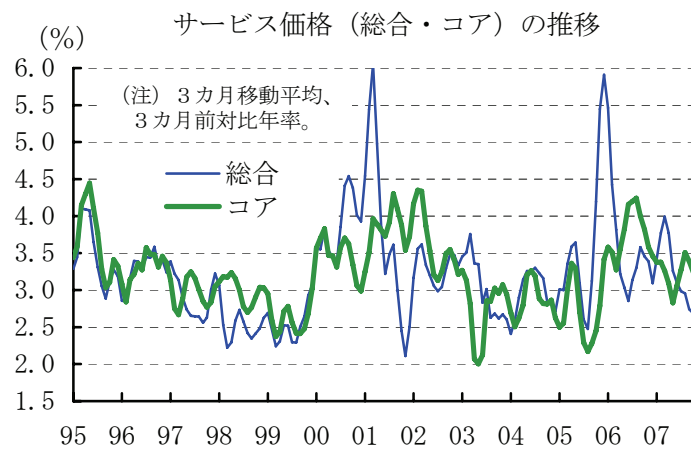
一方、輸入面をみると、世界的な価格競争の激化等によってエネルギーを除く財の輸入物価は抑制され、前月比でほぼ横ばいにとどまっている。今後も競争環境に大きな変化は起こり難いとみられ、輸入面からのインフレ圧力はエネルギー、原材料に限られるだろう。需給面からも、景気が緩やかな拡大になると予想されることから、需給ギャップは目先拡大すると見込まれる。

価格動向に大きな影響を与える競争環境は、アジア・中南米等からの安価な製品が引き続き流入する状況にある。このような中では、原材料価格や労働コストが上昇しても価格転嫁は難しく、財価格は緩やかな上昇が見込まれる。一方、高齢化による医療サービス価格の高止まりが続こう。以上のことを勘案すると、C P I コアは前年比+2%台前半での推移が見込まれる。





(出所) 米労働省



本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。